



読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それと、いっしょに「読後の感想」を、下記発行者あてにお送りいただければ、ありがたく存じます。なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思っておりますので、もしもお気づきの点がありましたら、あわせて教えてください。おかげさまで、カッパ・ブックスのどの本も版を重ねるごとに、誤植が一つ一つ少なくなっております。お手紙には、職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

三 光 日本人の中国における戦争犯罪の告白

昭和32年 3 月 10 日 初版発行 ©

¥ 150

発行兼編者 かん 神 き 吉 はる 晴 お 夫

印刷者 山 元 正 宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光 文 社
振替 東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。
表紙の模様・意匠登録 116613

〔美行製本〕

一^ん

光^{こう}

日本人の中国における戦争犯罪の告白

神^{かん}

吉^き

晴^{はる}

夫^お

編



商標登録 467067

殺光、焼光、略光、これを三光という
殺しつくし、焼きつくし、奪いつくすことなり

ま え が き

昭和三十一年の夏、ヘルシンキで開かれた国際ジャーナリスト集会の帰りに、イルクーツクから中国の旅客機に乗ったときのことです。同行の朝日新聞記者小原正雄おはらまさおさんが、ふと備えつけの新聞「人民日報」じんみんにっぽうを手にとってみると、中国にいる日本人戦犯が瀋陽しんやうと太原たいげんの特別軍事法廷で裁判されているという記事が大きく出ていました。

その記事によりますと、日本人戦犯は、みな心からその罪を謝し、これからは平和人士として平和のために力を尽すことを誓ったというのです。また日本軍の暴行をうけ、身体に何ヵ所も痛ましい傷痕のある中国人が証言台に立ち、こんな拷問をうけた怨みは一生忘れない。こんなことをやらせたのは一握りの日本帝国主義者の仕業だ。その人たちはあくまでも憎む。しかし、その手先に踊らされて戦争犯罪をした人たちでも、謝罪するならば、これを許して、日中友好のために、手を取りあっていこう、ということでした。私たちは感動しました。

北京ペキンにつくとすぐ、私たちの案内役である呉学文さんごがくぶん（新華通信社記者）に、新聞に出ていた日本人戦犯の書いたものがあるだろうか、あったら見せてほしいと申し入れました。それから私たちは東北トシベイ（旧満州）を回って八月上旬、また北京へもどりしました。

台風の余波をうけて、雨風のはげしい日の午後でした。呉学文さんがホテル北京飯店ペキンはんてんの私たちの部屋に、見るからに感じのよい一人の青年を連れてきて紹介しました。その青年が、雑誌「人民中国」日本語版の編集長康大川こうたいせんさんでした。

呉さんは、「きょうは、私はいりません。康さんは、私より日本語が上手ですから……。」と笑顔でいうと、ごゆっくりというように頭をさげて、部屋を出ていきました。聞けば康さんは、中学時代から東京にいて、早稲田大学わせだを出ているそうです。田舎育ちの私など、とても足元によれぬりっぱな日本語をしゃべるのです。

康大川さんが申しました。日本人戦犯が収容所にいるとき、中国人の指導員と話しあううちに、だんだんその罪を認めるようになり、みんなが進んで書いた手記がこれくらい（と言って、床から三尺ぐらいの高さを手で示し）私たちの手もとにあります。けっして強制的に書かせたものではありません、と言って、その目録を見せてくれました。ざっと、二百数十編もあったでしょうか。

私はその手記が、むしろ読みたくなりました。ぜひ読ませてほしいと申しますと、あとからコピーを送りましょうということになりました。約束どおり、それから二ヵ月半もすると、戦犯手記が東京へ届きました。全部で八二編、四百字詰になおして一、五八九枚という膨大ぼうだいなものでした。

私は読みすすむうちに、あまりにも残虐です、無慚です、なんと原稿を閉じてしまいたくなっ

たか分かりません。いままでに私もいくらかは、戦争の残虐さについて話を聞いていました。しかし、ここに告白されているものの中には、想像を絶するものがあります。

いくら戦争といっても、私たちの同胞が、こんなことまで、はたしてできるのだろうか。しかし残念ながら、これが事実なのです。私は「これが戦争なんだ！」と思いました。

日本にいるときは、平和な家庭にあつては、尊敬する父であり、優しい夫であり、仲のよい兄、たのもしき息子であつたのです。それが、ひとたび戦争のルツボの中に放りこまれると、まるで別の人のようになって、虐殺、略奪、暴行、放火、毒ガス弾の使用など、ありとあらゆる悪業のかぎりを平然とやってのけている。戦争のメカニズムの前には、教養をつんだ人間の知性など、嵐の前のローソクの灯のように、いっぺんに吹き消されてしまうことを思い知らされました。

そのような非道なことを戦場でした男でも、また日本に帰り、平和な環境におかれると、いつものまにか知性と優しさを取りもどすのです。ここにいたって、私は戦争の恐ろしさをあらためて考え直したのです。

戦争が終わってもう十二年になります。なにも今さら日本人の恥さらしみたいな手記を公けおおやにする必要はないではないか、という御意見もあるかと思ひます。ごもつともです。私も、あえて日本人の恥をさらしたくはありません。しかし、ここに書かれたような戦争犯罪は、戦場にあつ

た日本人の多くが、程度の差こそあれ、犯したのではないでしようか。その人たちは、はたしてどう考えているでしようか。ここに示された人たちのように自分の犯した罪について、このように深く反省したことがあるでしようか。

また銃後にあった人たちは、これほどまでに戦争の実体を知っているでしようか。戦争を知らない若い人たちは、戦争について、父や兄から、これほどまでに、勇気をもって語られたことがあるでしようか。

あなたはこの記録をお読みになって、どんな感想をいだかれるでしようか。おたがい、いろいろ論議があることと思います。その論議の機縁にもなればと願って、私はあえて、この原稿の一部を出版する決心をしました。

さいわい、この本ができあがる直前になって、この原稿の筆者たちのうち、日本に帰ってきた人たちでつくっている中国帰還者連絡会の代表と連絡ができました。それで私は、この原稿が書かれるまでのいきさつを「あとがき」として書いてもらいました。

おわりにあたって、このように戦争犯罪を反省し、贖罪^{しよくざい}し、勇気をもって戦争の実体を語ってくださった方々に、心からの敬意をささげたいと存じます。

昭和三十二年二月二十日

神^{かん}吉^き晴^{はる}夫^お

編集について

一、本書の性質上、執筆者の文章を尊重し、編者においては、原文に一切の訂正、補筆は行わなかった。ただ、かなづかいの不統一な点は、現代かなづかいに統一したほか、明きらかに意味不明の個所を、下にカッコで補っておいた。

一、地名のヨミは音よみにし、日本でききなれているものは、その慣用に従った。音よみできない場合は、中国音をカタカナで示した。

一、執筆者名については、それらの人の本名を出すことは、現実の日本の社会で生活していくうえに何らかの支障をきたすのではないかと懸念し、中国帰還者連絡会（東京都渋谷区千駄ヶ谷四ノ六八四 日中友好会館内）を通じて、本人に連絡した結果、3、5、8、12、14は仮名を希望、それ以外は本名を承諾したので、自筆署名で姓名を示した。自筆署名のわきに6ポ活字で、その兵種、階級を示した。階級は文中の事件当時のものである。

一、本書の組み立ては、おおよそ、つぎのようになっている。

1、3 戦時における人間の異常心理ともいうべきものを告白したもの。

4、9 日本軍の戦争のやり方、戦場の実相を記録したもの。

- 7 勞工狩り……………大木仲治 二
- 8 三 光―殺光・焼光・略光―…本田義夫 二五
- 9 「聖戦」とは?―部落掃蕩―……………鹿田正夫 二六
- 10 皇軍の家庭第五中隊―日本軍の暗黒面―高橋正銳 二三
- 11 暗 殺……………鵜野晋太郎 二四
- 12 挑 発……………橋場賢三 二五
- 13 一檢察官の告白……………溝口嘉夫 二六
- 14 心境の落ち着くまで……………山田勝一 二九
- 15 誰がおらあに字を

教えてくれたのか……………松本国三 二三

あとがき……………二九

編集について

一、本書の性質上、執筆者の文章を尊重し、編者においては、原文に一切の訂正、補筆は行わなかった。ただ、かなづかいの不統一な点は、現代かなづかいに統一したほか、明きらかに意味不明の個所を、下にカッコで補っておいた。

一、地名のヨミは音よみにし、日本でききなれているものは、その慣用に従った。音よみできない場合は、中国音をカタカナで示した。

一、執筆者名については、それらの人の本名を出すことは、現実の日本の社会で生活していくうえに何らかの支障をきたすのではないかと懸念し、中国帰還者連絡会（東京都渋谷区千駄ヶ谷四ノ六八四 日中友好会館内）を通じて、本人に連絡した結果、3、5、8、12、14は仮名を希望、それ以外は本名を承諾したので、自筆署名で姓名を示した。自筆署名のわきに6ポ活字で、その兵種、階級を示した。階級は文中の事件当時のものである。

一、本書の組み立ては、おおよそ、つぎのようになっている。

1／3 戦時における人間の異常心理ともいうべきものを告白したもの。

4／9 日本軍の戦争のやり方、戦場の実相を記録したもの。

10 と 12 日本軍隊と警察の内情を告白したもの。

13 と 15 戦争犯罪行為を告白するにいたった経過と心の動きを記したもの。

一、本書の印刷終了まぎわに、北京の康大川氏から、日本人の戦争犯罪行為を示す写真が三十三枚到着した。これは、かねて依頼してあったものである。これらの写真は、直接この手記に書かれている行為と、かならずしも関係しているものではない。しかし、中国における日本軍の異常行為を示すものとして、その一部を本書中に収録した。

1 太行の麓をしのんで——生体解剖——

野田実

(野田 実・軍医・陸軍中尉)

一九四五年四月のことであつた。炭坑で名高いあの河南省焦作鎮に私の所属していた旧第一百十七師団野戦病院が駐留していた。

当時すでに一ヵ月ほど前から、周辺の部隊の主力は、「老河口作戰」のため動いていたし、私の病院からも、この作戰のために約三分の一の兵員が参加していた。

また、一方、沖縄の戦局は、すでに決定的段階にはいったことが報ぜられており、この作戰が終わったら、師団は移動するだろうという噂さえ、どこからともなく伝えられていた。

病院には、私を含めて院長以下五名の軍医が残留していたが、新しい入院患者もほとんどなく、病院はひっそりとしており、重苦しい不安な空気がただよっていた。連日連夜、将校俱樂部に入り浸り、酒と女で、官能がすでに麻痺されたように荒さんでいた。私は、このような不安と焦燥のなかで、もっと強い刺激を求めていたのだ。

ちょうどこうした時期に、私は、突然、病院長軍医少佐丹保司平に呼ばれた。

「じつは明日、軍医の教育をやりたいのだが、君は昨年十月、鄭州^{ていしゅう}の十二軍司令部がおこなった軍医教育に直接参加して、経験済みだし、あの要領でやってくればいいのだ。憲兵分遣隊から——どうせ殺すのだから、病院で何か試験に使って処分してくれてもいい——という話があり、いい機会だから、軍医たちの手術の練習のために教育をやるうと思つてゐるのだ。戦地に来てゐる軍医は、内科だろうが、外科だろうが、救急の手術や盲腸の手術は、いつ、どこでもできるようにしておかねばならぬからなあ……。」

私は、病院長のこの言葉を聞いたとき、しめたとばかり、即座に「承知しました。」と引きうけていた。というのは戦地に来て以来、噂に聞く「生体解剖」を、一度やってみたいと思つてゐたが、去年鄭州のときは、傍^{そば}で見学してただけで、自分でやれなかったのが残念でたまらなかつたからである。

私は、医務室に引きあげてくると、すぐ実施計画を作つて、病院長に提出した。そして、その日のうちに準備を整え^{ととの}、とくに内科の新田^{にった}軍医中尉と高岩^{たかいわ}軍医少尉には、あらかじめ手術書や解剖書を見て研究しておくように言つておいた。

翌日午後、憲兵が一人の中国人を連行して来たことを、衛兵が知らせてくると、私は、外科の水谷^{みずたに}見習士官に、手術室に入れておくように命じた。

私は、何食わぬ顔をして、手術室のドアを開けてはいった。中国服を着た男の一人が憲兵であることは、すぐわかった。彼は、水谷と顔見知りであるとみえ、何か話をしていたが、私がいって行くと、「ご苦労さんです。」と挨拶した。みると、彼の手に堅く捕縄ほじょうが握られており、後手に縛しばられた、一人の黒い中国服を着けた、見るからに健康そうな中国人が、壁を背にして立っていた。

一見した私の最初の印象では、二十五、六歳の淳朴じゅんぽくな農民のように思われた。私はその人に気づかれぬように、ソッと彼の横顔を見た。丸顔の澄んだ瞳は、ガラス窓そうごしに外へ注そそがれており、よく見ると、目の周辺はやや黒ずんで憔悴しょうすいしていたが、表情は、まったく平静であった。

このとき、私はフト、この男は、いまここで殺されることを、気づいてはいないのだと直感した。すると、私も落ちつきを取り戻して来た。椅子を持ってこさせると、腰かけるように憲兵にうながした。憲兵は、もう、ここでは逃げないと思ったのであろうか、捕縄を解いて、その人を椅子に腰かけさせ、傍かたわらに彼も腰かけた。が、ズボンのポケットに突っこまれた彼の右の手の中には、拳銃が握られているのが外から見てもすぐわかった。

私は緊張した気分をやわらげようとして、ポケットからタバコを出すと、二人に一本ずつ手渡し、相手に安心させようとして、みずからマッチをすって火を差し出した。

やがて新田軍医と高岩軍医が手術室にはいって来た。つづいて森下衛生軍曹、衛生兵たち、最

後に色白の、低い鼻の下にチョビ髭を生やした病院長がつづいていた。病院長は、はいってくるや、いきなり、「野田中尉、準備はできているか。」と尋ねた。

私はタバコをすてて振り返り、水谷に、全身麻酔の用意をしろと目で合図すると、傍らの憲兵に向かって、努めておだやかな口調で言った。

「おれは中国語が話せないから、君からよくわかるように言い聞かせてくれないか。」

あたりはサーと緊張した空気に包まれていった。

私はつづけて、「体を診断するから、この手術台の上に寝るように。」と、二、三步手術台に近寄ると、台の上を軽く手で叩きながらうながした。

その人は、憲兵の言う中国語がよくわからぬとみえて、怪訝な顔つきで立ちあがったが、憲兵に押されて手術台に近づいた。水谷は後を向いて、何枚も重ねたガーゼの上にクロールエチールを浸し始めた。皆はグルリと手術台の周りをかこんだ。

私は焦り気味に「睡覺罷、睡覺罷（寝なさい、寝なさい）。」と手術台の上を叩いた。憲兵は手術台の上にあがれとばかりに、その人の腰を押しあげた。

彼が手術台の上に寝ようとした瞬間、私を含めて六人の男が、一気にその人の両腕、両脚、腰、肩、頭を手術台の上に堅く押さえつけたのと、水谷が、麻酔薬をいっぱい浸したガーゼを鼻と口に被せたのとは、ほとんど同時であった。彼は、猛然と起きあがろうとしたが、皆は懸命に押さ

えつけ、手術台が二、三回大きくゴトゴトと揺れた。

私は彼の頭を両手で抱え込むようにして手術台の上に固定させようと焦った。彼は憤怒に燃えた恐ろしい形相で、齒を食いしばり、呼吸を止めて、頭を左右に振り、口のところに当てがわれたガーゼをはずそうとしたが、水谷が夢中でガーゼを押さえている。私は早く麻酔薬を効かそうとして、両手の親指を両ほおにあて、上顎と下顎の間に、グツと力いっぱい突っこむと、口がひらいて、「ハア、ハア」と短く呼吸を شدした。

呆然としている水谷に、私は、「もっとクロールエチールをかける。」とどなった。彼は気がついたようにあわてて、クロールエチールの栓のバネを押さえた。クロールエチールは、細い線状をなしてガーゼに吸いこまれてゆく。蒸発する麻酔薬の強い臭氣が私の鼻をついた。やがて、全身に入っていた渾身の力が抜け始め、麻酔がかかり出したのがわかった。私はホッとして麻酔薬をエーテルに替えさせ、衛生兵に両脚を手術台に縛りつけさせた。しかし私は、完全に麻酔がかかるまでは皆に手を放させなかった。

呼吸もだんだんと元に回復し深い麻酔にはいったと見るや、私は麻酔係を森下衛生軍曹に交替させ、水谷に、手術開始のため手を洗い始めるように言った。衛生兵は隣りの準備室に用意しておいた手術機械を運び込んでいた。

物珍らしそうに見ていた憲兵が、「もうこれで何をされても、本人は分からないんですか？」